



## 北海道開拓150周年によせて



小林 潔司

土木学会 第106代会長

明治150年、それは北海道開拓150周年を意味します。

正確には「北海道命名150周年」と呼ぶべきかもしれませんが。

この記念すべき年に、土木学会全国大会が北海道大学で開催されました。土木学会会員が、北海道開拓とは何なのかを考える

いい機会だと思います。どさこ気質の一つとして、「おおらかさ」があると言われます。厳寒

の荒々しい原野を切り開くには、こだわりを捨て、人を押しつける

心根を捨て、皆分け隔てなく一致団結することが必要だった。

それが北海道開拓であったように思います。開拓使による上からの計画のもとで、故郷から移

住してきた開拓者による苦難の歴史。それは合衆国における個人の起業者精神にあふれる開拓

者精神とは、まったく違うものだと思います。

野幌にある北海道開発の村に、ニシン漁の杵船づくり、蹄鉄づくり、そりづくりの技術が残っています。まさに手仕事のため

のすばらしい技術です。時代が変われば必要な技術も変わります。しかし、開拓民が駆使した手

仕事は、もともと住んでいた場所ので利用されていた技術を道具として開拓に持ち込んだところ

で終わっているのです。残念ながら、これらの技術が北の大地

の豊饒な資源と一体となって新しい生産技術や伝統文化として

生まれ変わることはなかった。少し脱線します。ポルドー

の土地がブドウづくりに適していたのでしょう。ポルドーの地でワインづくりが始まる。

1154年ポルドーがイングラントに支配されたとき、ワイン

はポルドーの人々のアイデンティティーの源泉となりました。



写真1 北海道開拓の村 旧納内屯田兵屋

当時はブドウの品種に多様性がなくワインの品質は土地そのものと結びついていました。時は下り、カリフォルニア、オーストラリア等、新興地域でワイン生産がはじまり、ブドウの品種が重要視されるようになりました。ボルドーに危機が訪れる。しかし、ボルドーの人々は土地にこだわり最高品種のワイン生産をめざしました。EU統合の政治的理念としてフランスは「根ざす権利」、「選ぶ権利」という二つの権利を主張しました。ヨーロッパの政治的統合の前提として土地に根差したアイデンティティーの存在を保証すること。それを主張したのです。

根ざす権利と選ぶ権利。前者を地方の論理、後者を大都市の論理と呼び換えてもいい。人々の選択の結果として生まれる集積の力に対抗して、地方が頑張るためには土地に根ざすアイデンティティーを作る以外にはないのです。自然由来の資源やその地域に蓄積される技術。その結びつきがあつて、はじめて根ざす権利が育まれるのです。それが開拓なのです。北海道の地域アイデンティティーを育む、それが北海道開拓です。インフラは土地にはりついて動きません。インフラは、それぞれの地域における根ざす権利をつくり出しているのです。しかし、インフラがつながり国土全体を覆うようになると、人々の選ぶ権利を作りあげる大きな力となるのです。そしていつの間にかインフラ整備が、費用便益分析のように選ぶ権利だけで評価されるようになる。残念なことです。

積の力に対抗して、地方が頑張るためには土地に根ざすアイデンティティーを作る以外にはないのです。自然由来の資源やその地域に蓄積される技術。その結びつきがあつて、はじめて根ざす権利が育まれるのです。それが開拓なのです。北海道の地域アイデンティティーを育む、それが北海道開拓です。インフラは土地にはりついて動きません。インフラは、それぞれの地域における根ざす権利をつくり出しているのです。しかし、インフラがつながり国土全体を覆うようになると、人々の選ぶ権利を作りあげる大きな力となるのです。そしていつの間にかインフラ整備が、費用便益分析のよう